

# 記念館だより

Museum Wadatsuminokoe Newsletter

No. 15  
2021.5.31

## 大学における学徒出陣研究の到達点

館長 山辺 昌彦

学徒出陣やそれに関連する事項についての研究は各大学の百年史など

の年史編纂や単独の共同研究により、進展し多くの成果を生み出してい。学徒出陣研究で明らかになったことをここで概観してみたい。学徒出陣とは狭義では一九四三年の在学微集延期制度停止により、大学本科の学生や高等学校・大学予科・専門学校などの生徒が軍隊に入営、入団したことなどをさすが、広義では一九四四年・五五年の在学中の学生・生徒の入隊や在学年限の短縮や微集延期の最高年齢の引下げによる入隊も含めている。さらに大学によつては在学年の入隊すべてを指している所もある。

### 広義の学徒出陣の前段階

最高年齢が二五歳になり、一般学生は一九三九年からはじまり、一般学生はない。出陣学徒の壮行会は一九四一年には二四歳に引下げられた。在学年限の短縮は一九四一年度から始まり、三か月短縮され、一九四二年度からは六か月短縮された。これらによつて入隊した学生数はよくわから

### 狭義の学徒出陣

在学微集延期の全面停止は一九四三年一〇月二日公布の「在学微集延期臨時特例」により実施された。これらは軍の下級幹部の不足を学生で補い、学生の能力を軍事的に利用するためのものであつた。在学微集延期の全面停止は学徒全体を対象とするものであり、臨時徵兵検査を受けた。しかし、理科系・医科などの学徒は国家的に緊要な学校・学科に在学する者として、入営を延期された。そのため事实上、文科系のみが軍隊に徵集された。大学などは「徵集者名簿」の作成を義務付けられており、残っている大学も多く、この時期の徵集者数は比較的わかっている。最高学年は一九四三年一月に仮卒業し、一九四四年九月に卒業した。

### 出陣学徒壮行会

出陣学徒の壮行会は一九四三年一〇月二日に開かれた明治神宮外苑競技場での関東地方の学徒を集めた。中央のものだけでなく、各地域、大学でも開催された。壮行会が開催されたのはこの時期だけである。



撮影／斎藤 尚義

### 朝鮮人・台湾人の特別志願兵

朝鮮人・台湾人はこの時期はまだ兵役制度が実施されていないため「昭和十八年度陸軍特別志願兵臨時採用規則」を制定し、特別志願兵として、軍隊にとつた。自発的でなく、強制的に志願させたが、それでも志願しない学生は大学から除籍・除名された。いくつかの大学では、志願者数や除籍・除名数がわかつてている。

### 戦争末期の学徒出陣

戦争末期には、一九四三年一二月の「徵兵適齢臨時特例」により、徵兵適齢が一九歳に引下げられた。一九四五年二月に「修学継続の為の入営延期等に関する件」の改正により、入営延期すべき学校の範囲が狭められ、理工系の大学予科・専門学校・高等學校や師範学校の生徒には入営延

り、立命館大学国際平和ミュージアムでは他大学生の遺稿や遺品も収集している。大学文書館・大学史料館・大学文書館などでも所蔵している。立命館大学国際平和ミュージアムではなく、大学史編纂機関・大学

史料館などには学徒出陣関係の公文書も移管されている。

### 大学院特別研究員

学徒出陣が行われる中で、若手研究者の確保育成のために、大学院特別研究員制度が一九四三年九月の文

部省令「大学院又は研究科の特別研究に関する件」により、設置され

た。一期二年と二期三年で、学資と料を免除し、兵役も免除するものだ

った。当初の計画では、東京・京都・東北・北海道・九州・大阪・名古屋

### 戦没学生の追悼と平和

出陣学徒を含む戦没学生の名簿作成、慰靈祭・追悼式・平和祈念式の開催、慰靈碑・平和祈念碑の建立などが行われる。東京大学では戦没学生の名簿を作成し、

そのために軍の必要とする軍事研究を担う研究者の確保・養成であり、研究教育機関の内実をもつたものにならなかつた。一九四四年の第二回は文科系が外され、医も軍医不足のた

めに減らされた。

### 大学の整理・統合

文部省は学徒出陣で学生が減る中、大学などの整理と統廃合を進め、極端までの理工系中に再編成した。商業から産業・経営への変更、工業専門学校の設置、文科系大学の統合・専門学校化と定員削減などが行われた。特に立教大学の文学部と上智大学の商学部は廃止され、学生は慶應大学に委託された。また、明治学院高等部と高等商業部は青山学院文学部・高等商業部と関東学院高等商業部を統合し、明治学院専門部となつた。大学の校舎を貸すことが実施された。東京商科大学・大阪市立商科大学・慶應義塾大学・明治大学などが校舎を供出している。

### 大学の校舎供出

学徒出陣で学生が減つた大学などに、軍や軍需会社に貸すことが実施された。東京商科大学・大阪市立商科大学・慶應義塾大学・明治大学などが校舎を供出している。

開館日 (祝日・夏季・冬季休館あり)  
月・水・金

時 間 午後一時～四時  
＊団体の場合は別途考えますので曜日・時間等ご相談ください。

入館料 無料  
＊エレベーターもあります。  
＊資料閲覧・映像の視聴は事前にご連絡ください。

線「本郷三丁目」下車七分  
＊アクセス 地下鉄丸の内線・大江戸

# 『祈りの碑』

「きけわだつみのこえ」  
会津の学徒兵 長谷川信

涯

18年、徴兵猶予停止となつて学徒出陣となり陸軍に入隊、飛行学校館林教育隊に特別操縦見習士官（二期）として配属される。この時、同じ隊にいた同期が上原良司である。その後、信は満州に渡り訓練。昭和20年

『日記』・『修養録』

実さが見える

し、自分とする誠長谷川信が教えるも『日記』『修養録』を通して振り返ると、宗教人生を生きるうえで、

長谷川信が教えるもの  
『日記』『修養録』を通読し、彼の  
生を振り返ると、宗教を拠り所とす

A large, rectangular stone monument stands prominently in the foreground. It features vertical inscriptions in large characters: "兵戈無用" (Bōgō Mūyō) on the upper half and "大" (Tai) on the lower left. A smaller, rectangular plaque is attached to the base of the stone. The background shows traditional Japanese architecture with tiled roofs.

台座には『日記』の一節が刻まれている

葉書や封書は一切とつておけないことになつてゐるが、俺はどうしても俺の死ぬ時迄、持つて置かう」(『日記』)、「懐郷の想ひ切なり」(『日記』)、「猪苗代湖戸ノ口の静かな夕方、薄く霞のかかつた、鏡面のような湖、あの寂かな喜びを、Fと分かちあつたかつた。併し、それも空しい願い(『日記』)。

本書は福島県会津若松出身の学徒兵で、昭和20年4月に与那国島北方上空において23歳で戦死した長谷川信の生涯を描いたものである。また『きわわだつみのこえ』に一部のみ収録されていた軍隊時代の『日記』を、わだつみのこえ記念館収蔵の謄写版原稿によつてほぼ復元し、同時に書かれた『修養録』、御遺族・訓練地などに残されていた資料を用いて彼の実像に迫つている。

長谷川信は私の母校、福島県立喜多方高等学校(当時の喜多方中学校)の先輩である。私は『きわわだつみのこえ』の彼の遺稿を読んで感銘を受け、足跡を追つて全国を訪ね歩いた。精査の過程で私は「人類よ、猿の親類よ」というインパクトある表現で締めくくつた彼の『日記』全文を読んでみたが、そして彼がいかなる人物であつたかを知りたいと切に思つた。それがこの本を書いた動機である。

ら台湾に移動中、与那国島北方上空で米軍機の大群に撃墜され戦死している。戦後、両親や恩師等によつて昭和23年、猪苗代湖畔に追悼碑が建てられ、菩提寺である西蓮寺には平成14年に「兵戈無用」碑が造立された。兵は兵隊、戈は武器を表すもので、「大無量寿經」より採られている。文字通り平和を願う強いメッセージである。

ある。『日記』には戦争の悲惨さ、重隊への反発、宗教（キリスト教・浄土真宗）への傾倒、望郷の念などが記されている。『修養録』には訓練の様子や「戦陣訓」などが書かれるが、信は「隊長殿ノ訓話 感銘ナシ」など軍・上官への批判を記して提出しており、「モツト肝ヲ作レ」などの指導を受けている。

隙ノ見付ケ次第、ムサボルヤウニ説  
ンデキタ」(『修養録』)、「弥陀の誓願  
不思議にたすけられまいらせて、往  
生をば遂ぐるなりと信じて念佛申さ  
んと思い立ツ心」(『日記』)(歎異抄  
第一条)、「神との交りのみが俺を慰  
め励ましてくれる。」(『日記』)、「唯  
一絶対の道わ念佛のみ」(『日記』),  
「信仰さへありや、何ともないこつち  
や」(『日記』)、「俺の心は空虚に、又

ることができる。軍隊を批判しつづけ、訓練に励む。戦争に反対しながらも、戦場に向かう。二書には不整合な記述が連続するが、こうした混交こそ、迷いながらも前進した等身大の青年の人間・長谷川信のありのままの次元なのである。復元した『日記』『修養録』によって今まで知られてこなかった軍隊における彼の心の動きをさかみにたどることができた。そして

る人物であつたかを知りたいと切に思つた。それがこの本を書いた動機である。

長谷川信は大正12年4月12日、若松市の菓子商の家に生れた。昭和10年、名門会津中学校に入学。端艇部に所属し、学業成績も優秀であった。しかし訳あって4学年途中で休学。復学して、同15年、同志社大学予科へ進むが程なく帰郷。翌年、喜多方中学校5年に編入学した。そして1年後、明治学院の厚生科に進む。同



（『日記』）、「懐疑」。今は何も知らない子供達は俺達だ。俺達より丁度一昔前の、佑兄の頃の人達。俺達よりはまだ人間らしい生活を、少しでも送つてきてるんだもの。」（『日記』）などと記している。

これとは対照的に「屍ヲ越エ工テ准マン哉」（『修養録』）、失敗した時は「此處ニテ、碎ケテハナルマジ。」会津武士ノ名ニ背イテハナルマジ」（『修養録』）、「生への執着を捨てよ。

果へハ連続シナイ」(『修養録』)とは  
淨土真宗の核心を突いた端的な表現である。  
信仰に根差した強さを彼は最後まで持つていた。

(注) きむらけん『改訂新版』鉛筆  
部隊と特攻隊』(えにし書房 2019)  
9) ほか



(注) きむらけん『改訂新版』鉛筆  
部隊と特攻隊』(えにし書房 2019)  
9 ほか

## 常設展をみて

私は現25歳ですが、展示されている方々の当時の年齢も同じ年頃だと思うと、いろいろ感情が複雑になります。彼らの純粋に生きたい想いと、愛する人や国のために命を捧げるというはざまで、苦心していたと思います。その時代、時代によって、人々が頭を悩ます社会課題、個人問題は異なると思いますが、この見学を通じて歴史を学ぶ重要性を再認識しました。

(20.6.26 大田区 25歳)



ずっと来たいと思っていました。中学生の時に『きけわだつみのこえ』を読んで以来、このことを忘れてはならない、次世代に伝える責務があると思い続けています。特に、佐々木八郎さんの手記は何度も何度も繰り返して読んでいたので、今日実際に手記を見て、私と歳の変わらない青年が確かに生きていて、そして自分の死と徹底的に向かい合って亡くなったのだということを痛感しました。自分が死ぬことが最早決まってしまったような、十死零生の状況で、青年たちがどんな想いで言葉を綴ったのだろう。それを考える度に、どうにかこのこと、こうして死んでいった若者のこと、自分でも伝えられないだろうか。何か自分にできることはないだろうかと考えさせられます。今日はありがとうございます。また来ます。

(20.7.15 女性)



若くして戦争で散った若者の手記を読むと、とても感慨深いものがありました。彼らの死を無駄にしてはいけない。これからも戦争のない世の中になることを望みます。

(20.7.31)



戦後75年を迎え、当時を知る人の生の声を聞くことも難しくなってきました。「戦争反対の意志」の声は上がっても、世界情勢は不安定で、反戦・世界平和の旗振り役となるはずの日本がその声とは逆行しているように思えます。戦争資料や遺品の散逸も耳にするようになりました。時間の経過という深刻な問題にどう対処していくら良いかと考え、本日足を運ばせていただきましたが、やはり実際に自分の目で物を見、聞き、考えるに勝るものはないと思いました。自分と同じ出身の先人たちの苦悩を忘れず、次世代に語り継いでいくこと、それが今の自分にできることの一つではないかと考えました。



ここ数年、戦争の記憶を継承していくなくてはならないという意識が高まっておりました。身内でも祖母や祖父らが亡くなってしまい、実際に戦争を体験した世代が天寿を全うしていく中、平和を希求するにあたって私たちにできることはないか、という焦燥感ともいうべき感情が自分の中に湧き

## 来館者の「感想ノート」より

起こっていました。

本日、念願叶って来館することができました。若くして戦地に散っていった方々の無念さ、悲しみ、やるせなさ 様々な感情があつたことだろうと感じ、胸のつぶれる思いがしました。なぜ前途ある若者が無残にも生を終えなくはならなかつたのだろうか。日本という国は一体何を目指していたのだろうか。軍国主義一色だったこの日本に対し、怒りを覚えました。

亡くなつた方と恐らく同世代だったと思いますが、私には戦死した大叔父がいます。祖母の弟ですが、祖母は自分が亡くなるまで自室の仏壇に弟の写真をずっと飾っていました。亡くなつた方は、生きている者の心の中で生き続けますが、もし戦死しなければ、私も大叔父に会えていたと思います。生きて、人生を生きることができたはずです。

終戦記念日の前日に、こちらに足を運ぶことができ良かったと思います。戦後75年、まだ日本は平和を完全には手中にしています。亡くなつた方々の魂に誓える日が来るよう、戦争なき世の中の実現を目指していきたい。そんな思いを改めて新たにしました。

記念館の運営、本当にありがとうございます。

(20.8.14)



手記を読まさして頂きました。皆さん、すばらしい才能の方ばかりで、これらの人々を安易に戦争へ駆り立てた、一部指導者の無能が招いた戦争は、あまりにも悲惨すぎます。これらの人々が今生きていたら、少しは精神的には、ましな日本になっていたように思われるが、残念でならない。足元には再び迫つて来ていることをも、ひとりひとり忘れてはならない。



近くに住んでいるため、この記念館のことは以前から存じておりましたが、なかなか機会に恵まれず、今日やっと伺うことができました。戦没学生の方々のことは色々眼の前にすると、彼らを知るというよりも、彼らに没入する、自らと重ねて考えるという境地に達さずにはいられませんでした。

これだけセンチメンタルな学生たちが、葛藤したり、一抹の疑問を抱きながらも、戦争に命を投じていった、いかざるを得なかつたという現実はあまりに重いものです。

僕の友人や、僕自身が散つていったような錯覚に陥るほど他人事とは思われませんでした。

かれらには戦争や平和、命といった概念を考え抜き、悩み抜く心や力がありましたが、時間がそれを許さなかつたのだと感じ

ました。幸い僕にはそれを許された時間があります。

彼らの手向けるような生を営んでゆけばと思ひます。

また来ます。  
P.S. このような展示を維持・発展させてくださっている皆様に心から敬意と感謝の念を抱きます。ご苦労も絶えないとは存じますが、皆様どうぞ御自愛ください。

(20.8.31 文京区 23歳 男性 学生)



前々から通りかかる度、気になってはいましたが、今回初めて見学させていただき、戦争に翻弄されて散つていった若人の瑞々しい感性と、残した想いにふれて感動しました。振り返つて自分の最近のコロナを恐れて無氣力になつてゐる己を反省しています。

(70歳 主婦)



開館日が平日であり、会社を休んで伺いました。こんな最近の話にも関わらず、既に風化しているのではと、恐れています。本来は、るべき教育がなされず、このわだつみの声に耳を傾ける事さえ、なくなつてゐると思います。この貴重な場を多くの方に知つてもらひ、そして多くの方が学ぶきっかけになればと思います。私は多くの人にこの展示を紹介したいと思います。展示に関わつてゐる皆様、誠にありがとうございます。これらも宜しくお願ひいたします。

(20.11.1 群馬県 43歳 会社員)



日本の近現代史に関する資料収集の一貫として伺わせて頂きました。教授からこの記念館の訪問を勧められる以前から、近辺に住んでいることもあります。存在は知つていましたが、都合が中々つかず、この度ようやく来ることができました。日本ニュース177号の学徒出陣式典の映像から伝わる、戦況が悪化する中、戦いに赴かなければならぬ、学徒兵の想いを、より強く感じました。地元の地名や同郷の方を目に見つめ、80年近く昔の大先輩方と、我々が、共に日本で、青春を過ごしながらも、その内容の苛烈さに、尊敬の念が絶えません。これからもこの貴重な展示を続けて頂きますよう、どうかお願ひいたします。

(20.11.13 文京区 21歳 学生)



初めて来ました。『きけわだつみのこえ』は、学生時代に読んだはずですが、ここに来て、肉筆を見て悲しい気持ちになりました。読みなおそうと思います。貴重な資料の保存は大変だと思いますが、いつまでも残していただきたく存じます。



前途ある優秀な青年たちが、この命を落とされたことは痛恨の極みです。愛する人、自分の親兄弟のために尊い命を犠牲にして戦ってくれた方々に感謝と敬意が大切です。

(20.11.27)

## 平和ミュージアムめぐり

# 戦場体験史料館・電子版

山之内 裕明

高校生の夏。わたしはとあるイベントに参加した。そのイベントは、戦場を体験した祖父母世代より上の方とお話をする茶話会。当時参加した理由は、流行りのゲームなどの影響で話を聞きたかった程度のものだった。普段ほとんど行く機会のない浅草公会堂。そこに待っていたのは、現代ではおおよそ体験しないであろう、壮絶な体験の数々だった。爆撃の被害に遭い、必死に逃げ回った当時の心境や、銃声の鳴り響く戦場での戦闘経験などの生々しいもの。

戦争体験とはどうしても悲惨なことが取り糾されるものだ。しかし、それだけではなく仲の良かつた友人や世話になつた人の話といった、日常の楽しみや面白話まで、様々なことを聞くことができた。こうした身近な話題も含めたものが、当時を生きた彼らにとっての日常であり、確かに存在していた記憶もある。

では、聞くためには何が良いのかと探したところ、イベントを主催していた団体が運営するインターネットサイトである「戦場体験史料館」(<http://www.jvwap.jp/>)を見つけた。史料館と言つても建物があるわけではないが、このサイトには、個人の記憶の証言が年代別・戦地別に紹介されており、多くの「記憶」が



残っていた。中国大陸での出来事や沖縄戦など、一つの大きな事象であっても、個人レベルでの体験は大きく異なる。それを直接聞くことによって、本人の細かな表情を見たり、公の場では言いづらい話を聞くことも出来る。だが、戦争から既に76年も経つ。その中で、当時の「記憶」を見ることが出来る「戦場体験史料館」は大きな意義を果たしているのである。

例えば、戦艦武藏の搭乗員の体験について、話を見てみたい場合は、現時点で一人の話が掲載されている。一人は信号兵、もう一人は主砲第一発令所に配属されていた。彼らは同じ武藏に乗船していたので大枠は同じだが、細かい体験や見たもの、聞いたこと、語る切り口などは同じではない。生還したその後の配置や

敗戦を迎える場所、敗戦後なども違う。また、私自身もこの二人以外の武蔵の搭乗員の体験を聞き取りに行つたことがある。準備が出来次第、掲載予定である。

いたとしても、戦争体験は一人として同じものはない。だからこそ、一人ひとりの証言を残し、当時の「記憶」を現代に留める破片が必要になる。

薄れゆく「記憶」は一つの事象としてまとめられ、中身は分からなくなつていくものだ。そうした薄れる「記憶」を留める役割を果たすのが、この「戦争体験史料館」なのである。

もし、どこかで聞いた戦争体験があれば、それと同じ場にいた違う人の証言も覗いてみてほしい。おそらく、似ているようで全く異なる体験の多くを見ることとなるだろう。そこには、体験を話してくれた本人たちが生きた時代の破片があるはずだ。

◆文京ミューズネット 文京区内にある博物館・美術館・庭園など三五施設（当館も加盟）の合同イベント「文京ミューズフェス

タ二〇二〇」が昨年一二月一五日

（木）～二〇日まで、ギャラリーシビック（文京シビックセンター一階）にて開催されました。当館は戦没学生九名（板尾興市、上原良司、宇田川達、篠崎一郎、白井成徳、関口清、田村正、原亮、松岡欣平）の遺稿に収めた八枚を出展しました。来場者は八一四名。

◆「文京ミューズネットマップ」（日本語・英語）、「平和マップ」（文京区にある平和関連施設の紹介）は当館または文京区アカデミー推進課文化事業係で入手できます。

◆平和のための博物館・市民ネット

全国交流会は第10回国際平和博物館会議に合わせて九月一九日にオンライン会議で開催されました。

◆来館者

\*昨年度は緊急事態宣言により四月

～五月、二〇二一年一月～三月二二

日まで休館のため来館者は一七七人でした。

◆ご寄付

記念館の維持・発展のために会費

（維持・賛助）やご寄付をお寄せくだ

さつた皆さま、また来館の折にカン

パンしてくださった皆さまに深く感謝

申しあげます。ありがとうございます。

◆役員・スタッフ紹介

法人理事長・渡辺總子、副理事長・

岡田裕之、記念館館長・山辺昌彦、

常務理事・岡安茂祐、奥田豊己、墓

快久。ふだんの記念館運営は、山辺

昌彦、奥田豊己、墓快久、深澤かよ

子、渡辺總子があたっています。

本年もどうぞよろしくお願い申し

あげます。

## 短 信

### ◆調査・研究への協力

- ・山崎エマ監督『ウイール・オブ・フェイント』『無法松の一生』をめぐる数奇な運命♪(11／4 東京国際映画祭上映)
- ・『KAMIKAZE』(ARDドイツテレビ) 1000年 上映会(於・ドイツ)
- ◆マスメディアへ協力

・「わだつみ会 不戦誓い70年、戦没学生の声を後世に」(共同通信8／5)

・「戦争の記憶継承 資料館・遺跡をどう残す」(読売新聞(8／15))

5)

・東京土建一般労働組合機関紙「けんせつ」八月二〇日号

## 「ネットワーク」短信

東京ミュージアムめぐり

・東京土建一般労働組合機関紙「けんせつ」八月二〇日号

認定NPO法人  
わだつみのこえ記念館

発行日 2021年5月31日  
第15号



E-mail : info@wadatsuminokoe.org  
URL : <https://www.wadatsuminokoe.com>

東京都文京区本郷5-29-13  
(〒113-0033) 赤門アビタシオン1階  
電話／F ax 03-3815-8571  
郵便振替00180-3-612451  
URL : <https://www.wadatsuminokoe.com>